

妙法蓮華經。從地涌出品。第十五

爾の時に他方の國土の諸の來れる菩薩摩訶薩の八恒河沙の數に過ぎたる、大衆の中に於て起立し合掌し禮を作して、佛に白して言さく、

世尊、若し我等佛の滅後に於て此の娑婆世界に在つて、勤加精進して是の經典を護持し讀誦し書寫し供養せんことを聽したまわば、當に此の土に於て廣く之を説きたてまつるべし。

爾の時に佛、諸の菩薩摩訶薩衆に告げたまわく、

止みね、善男子、汝等が此の經を護持せんことを須いじ。

所以は何ん、我が娑婆世界に自ら六萬恒河沙等の菩薩摩訶薩あり。一一の菩薩に各六萬恒河沙の眷屬あり。是の諸人等能く我が滅後に於て、護持し讀誦し廣く此の經を説かん。

佛是れを説きたもう時、娑婆世界の三千大千の國土、地皆震裂して、其中より無量千萬億の菩薩摩訶薩あつて同時に涌出せり。是の諸の菩薩は身皆金色にして、三十二相・無量の光明あり。先より盡く娑婆世界の下、此の界の虛空の中に在つて住せり。是の諸の菩薩、釋迦牟尼佛の所説の音聲を聞いて下より發來せり。一一の菩薩皆是れ大衆唱導の首なり。

各六萬恒河沙等の眷屬を將いたり。況んや五萬・四萬・三萬・二萬・一萬恒河沙等の眷屬を將いたる者をや。況んや復乃至一恒河沙・半恒河沙・四分の一・乃至千萬億那由他分の一なるをや。況んや復千萬億那由他の眷屬なるをや。況んや復億萬の眷屬なるをや。況んや復千萬・百萬・乃至一萬なるをや。況んや復一千・一百・乃至一十なるをや。況んや復五・四・三・二・一の弟子を將いたる者をや。況んや復單已にして遠離の行を樂えるをや。是の如き等比無量無邊にして、算數・譬諭も知ること能わ

ざる所なり。

是の諸の菩薩、地より出で已つて、各虚空の七寶妙塔の
多寶如來・釋迦牟尼佛の所に詣づ。到り已つて二世尊に向いた
てまつりて頭面に足を禮し、乃至諸の寶樹下の師子座上の
佛の所にも亦皆禮を作して、右に繞ること三市して合掌
恭敬し、諸の菩薩の種種の讚法を以て、以て讚歎したてまつ
り、一面に住在し欣樂して二世尊を瞻仰す。是の諸の菩薩
摩訶薩、地より涌出して、諸の菩薩の種種の讚法を以て佛を
讚めたてまつる。是の如くする時の間に五十小劫を経たり。

是の時に釋迦牟尼佛默然として坐したまえり。及び諸の四衆
も亦皆默然たること五十小劫、佛の神力の故に諸の大衆をし
て半日の如しと謂わしむ。爾の時に四衆、亦佛の神力を以ての
故に、諸の菩薩の無量百千萬億の國土の虚空に徧滿せるを見
る。是の菩薩衆の中に四導師あり。一を上行と名け、二を無邊
行と名け、三を淨行と名け、四を安立行と名く。是の四
菩薩其の衆中に於て最も爲れ上首唱導の師なり。大衆の前に
在つて各共に合掌し、釋迦牟尼佛を觀たてまつりて問訊して
言さく、

世尊、少病少惱にして安樂に行じたもうや不や。度すべき
所の者教を受くること易しや不や。世尊をして疲勞を生きしめ
ざる耶。

爾の時に四大菩薩、而も偈を説いて言さく

世尊は安樂にして 少病少惱にいますや

衆生を教化したもうに 疲倦無きことを得たまえりや

又諸の衆生 化を受くること易しや不や

世尊をして 疲勞を生きしめざる耶

爾の時に世尊、諸の菩薩大衆の中に於て是の言を作したま

わく、

是の如し、是の如し。諸の善男子、如來は安樂にして少病少惱なり。諸の衆生等は化度すべきこと易し。疲勞あることなし。所以は何ん、是の諸の衆生は世世より已來、常に我が化を受けたり。亦過去の諸佛に於て供養・尊重して諸の善根を種えたり。此の諸の衆生は始め我が身を見、我が所説を聞き、即ち皆信受して如來の慧に入りなき。先より修習して小乗を學せる者をば除く。是の如き人も、我今亦是の經を聞いて佛慧に入ることを得せしむ。

爾の時に諸の大菩薩、而も偈を説いて言さく、
善哉善哉 大雄世尊

諸の衆生等 化度したもうべきこと易し
能く諸佛の 甚深の智慧を問いたてまつり

聞き已つて信解せり 我等隨喜す

時に世尊、上首の諸の大菩薩を讚歎したまわく、

善哉善哉、善男子、汝等能く如來に於て隨喜の心を發せり。

爾の時に彌勒菩薩及び八千恒河沙の諸の菩薩衆、皆是の念を

作さく、

我等昔より已來、是の如き大菩薩摩訶薩衆の地より涌出して

世尊の前に住して、合掌し供養して如來を問訊したてまつる

を見ず聞かず。

時に彌勒菩薩摩訶薩、八千恒河沙の諸の菩薩等の心の所念を知り、并に自ら所疑を決せんと欲して、合掌し佛に向いた

てまつりて、偈を以て問うて曰さく、

無量千萬億 大衆の 諸の菩薩は

昔より未だ曾て見ざる所なり

願わくは兩足尊説きたまえ

是れ何れの所より來れる 何の因縁を以て集れる
巨身にして大神通あり 智慧思議し叵し

其の志念堅固にして 大忍辱力あり
衆生の見んと樂う所なり 爲れ何れの所より來れる

一一の諸の菩薩 所將の諸の眷屬
其の數量有ること無く 恒河沙等の如し

或は大菩薩の 六萬恒沙を將いたるあり
是の如き 諸の大衆 一心に佛道を求む

是の 諸の大師等 六萬恒河沙あり
俱に來つて佛を供養し 及び是の經を護持す

五萬恒沙を將いたる 其の數是れに過ぎたり
四萬及び三萬 二萬より一萬に至る

一千一百等 乃至一恒沙
半及び三四分 億萬分の一

千萬那由他 萬億の 諸の弟子
乃ち半億に至る 其の數復上に過ぎたり

百萬より一萬に至り 一千及び一百
五十と一十と 乃至三三二

單己にして眷屬なく 獨處を樂う者
俱に佛所に來至せる 其の數轉た上に過ぎたり

是の如き 諸の大衆 若し人等を行いて數うるること
恒沙劫を過ぐとも 猶お盡くして知ること能わじ

是の 諸の大威徳 精進の菩薩衆は
誰か其の爲に法を説き 教化して成就せる

誰に従つて初めて發心し 何れの佛法を稱揚し
誰の經を受持し行じ 何れの佛道を修習せる

是の如き 諸の菩薩 神通大智力あり

四方の地震裂して 皆中より涌出せり

世尊我昔より來 未だ會て是の事を見ず

願わくは其の所從の 國土の名號を説きたまえ

我常に諸國に遊べども 未だ會て是の事を見ず

我此の衆の中に於て 乃し一人をも識らず

忽然に地より出でたり 願わくは其の因縁を説きたまえ

今此の大會の 無量百千億なる

是の諸の菩薩等 皆此の事を知らんと欲す

是の諸の菩薩衆の 本末の因縁あるべし

無量徳の世尊 唯願わくは衆の疑を決したまえ

爾の時に釋迦牟尼佛の分身の諸佛、無量千萬億の他方の國土よ

り來りたまえる者、八方の諸の寶樹下の師子座上に在して

結跏趺坐したまえり。其の佛の侍者、各各に是の菩薩大衆の三

千大千世界の四方に於て、地より涌出して虚空に住せるを見

て、各其の佛に白して言さく、

世尊、此の諸の無量無邊阿僧祇の菩薩大衆は何れの所より

來れる。

爾の時に諸佛各侍者に告げたまわく、

諸の善男子、且く須臾を待て、菩薩摩訶薩あり、名を彌勒

という。釋迦牟尼佛の授記したもう所なり。次いで後に作佛す

べし。已に斯の事を問いたてまつる。佛今之を答えたまわん。

汝等自ら當に是れに因つて聞くことを得べし。

爾の時に釋迦牟尼佛、彌勒菩薩に告げたまわく、

善哉善哉、阿逸多、乃し能く佛に是の如き大事を問えり。

汝等當に共に一心に精進の鎧を被、堅固の意を發すべし。

如來今諸佛の智慧・諸佛の自在神通の力・諸佛の師子奮迅の力

・諸佛の威猛大勢の力を顯發し宣示せんと欲す。

爾その時に世尊せそん、重ねて此この義ぎを宣のべんと欲ほつして、偈げを説といて言のたまわく、

當まさに精進しやうじんして一心しんなるべし 我われ此この事じを説とかんと欲ほつす

疑悔ぎげあること得うることなかれ 佛智ぶつちは思議しぎし回がたし

汝なんじ今いま信力しんりきを出いだして 忍善にんぜんの中なかに住じゆうせよ

昔むかしより未いまだ聞きかざる所ところの法ほう 今いま皆みな當まさに聞きくこと得うべし

我われ今いま汝なんじを安慰あんゐす 疑懼ぎくを懷いだくこと得うることなかれ

佛ほとけは不實ふじつの語ことばなし 智慧ちゑはか量はかるべからず

得うる所ところの第一だいいちの法ほうは 甚深じんじんにして分別ふんべつし回がたし

是かくの如ごときを今いま當まさに説とくべし 汝なんだち等たち一心しんに聽きけ

爾その時に世尊せそん、是この偈げを説とき已おわつて、彌勒みろく菩薩ぼさつに告つげたまわ

く、

我われ今いま此この大衆だいしゆに於おいて汝等なんだちに宣告せんごうす。阿逸多あいつた、是この諸もろの大菩薩だいぼさつ

摩訶薩まかさつの無量無數むりやうむしゆ阿僧祇あそうぎにして地ぢより涌出ゆじゆつせる、汝等なんだち昔むかしより未いま

だ見みざる所ところの者ものは、我われ是この娑婆世界しゃはせかいに於おいて阿耨多羅三藐三菩提あのおくたらみやくぼだい

を得え已おわつて、是この諸もろの菩薩ぼさつを教化きやうけ示導じどうし、其その心こころを調伏じやうふくして

道ぢゆうの意いを發おこさしめたり。

此この諸もろの菩薩ぼさつは皆是みなこの娑婆世界しゃはせかいの下した此この界かいの虚空こくうの中なかに於おいて

住じゆうせり。諸もろの經典きやうでんに於おいて讀誦どくじゆ通利つうりし思惟しゆい分別ふんべつし正憶念しやうおくねんせ

り。阿逸多あいつた、是この諸もろの善男子等ぜんなんしとうは衆しゆに在あつて多おほく所説しよせつあること

を樂ねがわず。常つねに靜しずかなる處ところを樂ねがひ勤行精進ごんぎやうしやうじんして未いまだ曾かつて休息くそく

せず。亦また人にん・天てんに依止えしして住じゆうせず。常つねに深智じんちを樂ねがつて障礙しやうげある

ことなし。亦また常つねに諸佛しよぶつの法ほうを樂ねがひ、一心しんに精進しやうじんして無上慧むじやうえを求もと

む。

爾その時に世尊せそん、重かさねて此この義ぎを宣のべんと欲ほつして、偈げを説といて

言のたまわく、

阿逸あいつ汝なんじ當まさに知しるべし 是この諸もろの大菩薩だいぼさつは

無數劫より來 佛の智慧を修習せり

悉く是れ我が所化として 大道心を發さしめたり

此れ等は是れ我が子なり 是の世界に依止せり

常に頭陀の事を行じて 靜かなる處を志樂し

大衆の憤鬧を捨てて 所説多きことを樂わす

是の如き諸子等は 我が道法を學習して

晝夜に常に精進す 佛道を求むるをもつての故に

娑婆世界の 下法の空中に在つて住す

志念力堅固にして 常に智慧を勤求し

種種の妙法を説いて 其の心畏るる所なし

我伽耶城 菩提樹下に於て坐して

最正覺を成ずることを得て 無上の法輪を轉じ

爾して乃ち之を教化して 初めて道心を發さしむ

今皆不退に住せり 悉く當に成佛を得べし

我今實語を説く 汝等一心に信ぜよ

我久遠より來 是れ等の衆を教化せり

爾の時に彌勒菩薩摩訶薩及び無數の 諸の菩薩等、心に疑惑

を生じ未曾有なりと怪んで是の念を作さく、

云何ぞ世尊少時の間に於て是の如き無量無邊阿僧祇の 諸の

大菩薩を教化して、阿耨多羅三藐三菩提に住せしめたまえる。

即ち佛に白して言さく、

世尊、如來太子たりし時、釋の宮を出でて、伽耶城を去るこ

と遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を成ずること

を得たまえり。是れより已來始めて四十餘年を過ぎたり。世尊、

云何ぞ此の少時に於て大に佛事を作したまえる。佛の勢力を以

てや、佛の功德を以てや、是の如き無量の大菩薩衆を教化して

當に阿耨多羅三藐三菩提を成ぜしめたもうべき。

世尊、此の大菩薩衆は、假使人あつて千萬億劫に於て數うとも盡くすこと能わず、其の邊を得じ。斯れ等は久遠より已來、無量無邊の諸佛の所に於て、諸の善根を植え菩薩の道を成就し常に梵行を修せり。世尊、此の如きの事は世の信じ難き所なり。

譬えば人あつて色美しく髮黒くして年二十五なる、百歳の人を指して是れ我が子なりと言わん。其の百歳の人亦年少を指して、是れ我が父なり我等を生育せりと言わん。是の事信じ難きが如く、佛の亦是の如し。得道より已來其れ實に未だ久しからず。而るに此の大衆の諸の菩薩等は已に無量千萬億劫に於て、佛道の爲の故に勤行精進し、善く無量百千萬億の三昧に入・出・住し大神通を得、久しく梵行を修し、善能次第に諸の善法を集い、問答巧みに、人中の寶として、一切世間に甚だ爲れ希有なり。

今日世尊、方に佛道を得たまひし時初めて發心せしめ教化示導して、阿耨多羅三藐三菩提に向わしめたりと云う。世尊佛を得たまひて未だ久しからざるに、乃し能く此の大功德の事を作したまえり。我等は復佛の隨宜の所説・佛の所出の言、未だ曾て虚妄ならずと信じ、佛の所知は、皆悉く通達すと雖も、然も諸の新發意の菩薩、佛の滅後に於て若し是の語を聞かば、或は信受せずして法を破する罪業の因縁を起さん。唯然、世尊、願わくは爲に解説して我等が疑を除きたまえ。及び未來世の諸の善男子、此の事を聞き已りなば亦疑を生ぜじ。

爾の時に彌勒菩薩、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言さく、

佛昔釋種より 出家して伽耶に近く

菩提樹に坐したまえり 爾しより來 尙お未だ久しからず
此の諸の佛子等は 其の數量るべからず
久しく已に佛道を行じて 神通智力に住せり
善く菩薩の道を學して 世間の法に染まざること
蓮華の水に在るが如し 地よりして涌出し
皆恭敬の心を起して 世尊の前に住せり
是の事思議し難し 云何ぞ信すべき
佛の得道は甚だ近く 成就したまえる所は甚だ多し
願わくは爲に衆の疑を除き 實の如く分別し説きたまえ
譬えば少壯の人 年始めて二十五なる
人に百歳の子の 髮白くして面皺めるを示して
是れ等我が所生なりといひ 子も亦是れ父なりと説かん
父は少くして子は老いたる
世を擧つて信ぜざる所ならんが如く
世尊も亦是の如し 得道より來 甚だ近し
是の諸の菩薩等は 志固くして怯弱なし
無量劫より來 而も菩薩の道を行ぜり
難問答に巧みにして 其の心畏るる所なく
忍辱の心決定し 端正にして威徳あり
十方の佛の讚めたもう所なり 善能分別し説く
人衆に在ることを樂わず 常に好んで禪定に在り
佛道を求むるをもつての故に 下の空中に於て住せり
我等は佛に従つて聞きたてまつれば
此の事に於て疑なし
願わくは佛未來の爲に 演説して開解せしめたまえ
若し此の經に於て 疑を生じて信ぜざることあらん者は
即ち當に惡道に墮つべし 願わくは今爲に解説したまえ

是こゝの無量むりやうの菩薩ぼさつをば
教化きやうけし發心ほつしんせしめて
云何いかんしてか少時しょうじに於おて
不退ふたいの地じに住じゆうせしめたまえる

妙法蓮華經卷第五